

道

A.S. 1971 年神奈川県川崎生まれ♀

ラジオ、映像系をわたり歩き、現在は Web 系教育コンテンツの企画制作に従事。教育ってなんだろう、って考え始めて大学院に入院した、ドイツ留学の経験がある一応「日本人」。

この文章は私が大学 3 年生の時に書いたものです。この時感じたことが、いまの私に影響を及ぼしているのはほぼ間違えありません。まずは、原文のままを下記に記します。当時は NATO や EU など国際関連の知識が足りず多少正確でない記述もありますが、それは若気の至りとご容赦ください。

「ほんの数年前までは、ドイツ人は車である国へバカンスにいったものだよ。けれども今は。。。」

アウトバーンを走っているとふと友人がこういったのを思い出した。ニュースでみたボスニア・ヘルツェゴビナのことが理解できなくて質問したとき、ぼそつといった一言である。

車でいけるくらい親密な関係をもっているヨーロッパとユーゴ。テレビのチャンネルをひねればニュースには必ずユーゴの凄惨な景色とリポーターの緊迫した面持ちが映っていた。それくらい近い国だから他人ごとには思えないのだろう。NATO が、EU が介入するのも理解できる。

日本の道は日本全国へとつづく。しかし島国のためすべては海へとつづく。国際社会に立ち遅れているとよく言われるのは隣国と海を隔ててしか接していないためなのだろうか。けれども道は海にでたところでおわるわけではない。海はすべての陸地に接している。島国はまわりを海に囲まれているから孤立しているのではなく、海に接しているから国際的にもなれる。いま、島国だからこそ日本は世界の平和のためにその役割を担わなければならない。

帰国してからも車に乗っているとふとあの時のことを思い出す。ボスニアへとつづくアウトバーンの道、この道の向こうにはニュースでみる戦争が実際に起こっているのだと感じて、あらためて自分が「平和」というこの上もない財産をいままで何の疑いもなく持っているのを感謝したこと、またそう感じたとき、テレビで流れた両親とはぐれて泣き叫んでいる子供の声が、一瞬耳元で聞こえた気がしたことも。。。

はっきりと覚えていませんが、この文章を書いたのはおそらく 1994 年の 4 月ごろです。留学していたのが 92 年 9 月～93 年 7 月にかけてですからこのときに思ったことを思い出して書いたのだと思います。

おそらくこれが、私が初めて戦争を身近に感じた経験です。

そして、戦争を通じて「平和」というのを実感したときでもあります。

つまり、学校教育で教えられる太平洋「戦争」からは感じられなかった「平和」の大事さが、一瞬のうちに自分のなかでストンと落ちた瞬間でした。

そしていまドイツの教育に関連した事柄を研究テーマに据えています。その遠因は、ドイツのような戦争責任のとりかたが日本にない、いいかえれば日本が歴史に正面を向いて向かい合っていないから、私は日本で戦争と平和についてあまり考える機会をもてず、遠くはなれたドイツで初めてその概念を獲得できた、と思うからなのです。